
ドクター・ピンク

三野大貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドクター・ピンク

【Nコード】

N74230

【作者名】

三野大貴

【あらすじ】

ある卑屈でひねくれものの医者はある理由から心霊スポットとして有名な火人島へ移住する。そこで出会ったやたら空気の読めない一人の子供。

ほかにもその島にはやたら変な奴ばかり住んでいて・・・
時々シリアスな基本ギャグストーリーです

プロローグ

「幸運はそれが失われるまでは知られない」

セルバンテスという小説家がドン・キホーテという話に書いたセリフだ

最初聞いたときはそんなことはないと思っていたがまさにその通りだった

あの「幸せではないが不幸じゃない」と思っていた日々がいかに幸せだったか

「いつも隣にいた奴がいなくなるわけがない」

甘い幻想だ

気付くのは全て無くしてからだ

あの島へ行くまで俺は今が一番不幸だと思っていた
だが違った

あの島に住むイカれた奴ら

あいつらのせいで俺の人生はもっと不幸になった

プロローグ（後書き）

初めて投稿する小説です。

色々つたない部分もありますが、どうかよろしくお願いします。

感想も書いてくれると嬉しいです。

第1話 心霊スポットは基本何も起こらない

「火人島」

ひびとじま と読むらしい。

瀬戸内海の小島だが、東京では有名な心霊スポットだ。

昔大きな火事があったて島全体が燃え島民全員が犠牲になったとか、一家惨殺事件があったとか。

それだけならよくある話かもしれないが、「入った人が一人も帰ってこない」とか「住民が武器を持って襲ってくる」など、もはや都市伝説のようなものさえある。

しかし離島であるため心霊スポットだが肝試しのようなことはほとんど無いらしい。

ようするに人口が少ない小島で、外から来る人もほとんどいない「人間嫌い」の人が住みやすいところだ。

外からの人の通りがほとんど無い「まさに孤島」。
そこの港に一つの小さな漁船が止まった。

「・・・・・・・・着いたよ」

全身黒づくめのやせている不気味な男が後ろで寝ていた男に話しかけた。

「ああ・・・」

ありがとな 孤島というわりには思ったより近いんだな」

そういうと男は港に降りた。

辺りを見回すとそこには、看板とくたびれた木造の休憩所のようなものがあるだけでほかは何も無かった。

看板には「ようこそ火人島へ」と書いているようだ。
だが・・・

「この看板怖すぎるだろ・・・」

確かにその看板は明るい雰囲気を出そうとして動物や子供の絵が描かれているがさびついていてその絵がよけい不気味になっていた。

「なあ 俺は村長？であってんの？

とにかくこの島で一番偉い人に会いたいんだけどさ、どこにいるか知らないか？」

男が振り向くとそこに漁船と黒づくめの男の姿は無かった。

いや、あるにはあるがもう海へ向かいとても小さくなっていた。

「ちよつ待つ」

思わず追いかけようと一步を踏み出した。
しかしここは港だ。一步先はもちろん海。

「うおっ！」

反射的に足を戻そうとしたが、そんなうまくいくわけも無い。
そのままバランスを崩し海へ落ちていった。

幸い今日の天気は快晴で波もそんなに高くは無い。
自力で泳いで近くの砂浜にたどり着くことができた。

その砂浜は港と同じ何もない殺風景なものだった。
一つ救いがあるとすればあの無駄に不気味な看板が見当たらないことだった。

「ぶはっ」

男は海から這い出てごろりと空を見上げて横になった。
雲ひとつない青い空から太陽の光が降り注ぐ。
が、間違ってもいい気分とはいえなかった。
どこか楽しむことにためらいがあった

「クソッ、気分わりい……………」

「なんで？」

ニユツと横から頭を出され急にかけられた声にビクツとなりがばつと頭を持ち上げた。
思いつきりぶつかると思ったが、すつと頭をよけられた。

「アハハッ　びしょぬれで何やってるのおじさん」

「アア？」

そこにいたのは小学生低学年ぐらいの子供だった。
服装と顔つきからしてたぶん女の子だろう。
薄茶色の髪で、それが顔の左側を目の辺りまで覆い隠していた。

「なんだお前」

「んーおじさんこそ見ない顔だけど？
もしかして観光客？」

口調からすればおそらくこの島の住人だと思う。
しかし男はそんなことはどうでもよかった。

「おいガキ 『おにーさん』はまだ20代だ
おじさんはやめろ」

男が立ち上がりながら言う子供はニツと笑った

「私は鎧塚叶っていうの
『おにーさん』は？」

「ヨロイツカキヨウって・・・
ガキのくせにえらくごつい名前だなオイ」

「いや年齢は関係ないんじゃない
それでおじさつ、おにーさんの名前は？」

「おい今おじさんって言いかけたろ」

あからさまにいらだちながら男はにらみつけた。

だが、そんなことはまったく気にせずに叶は名前を聞き続ける。

「いや 言っていないよ
あつ名前教えてくれれば名前で呼ぶからさ
教えてよ」

「もつといやだ
俺はな、自分の名前が嫌いなんだ」

「へえ

変わってるね　なんて名前なの？」

「人の話聞いてんのか！」

チツ、と舌打ちして周りを見回した。
コイツ以外に人がいる感じはしない。
というか本当に何も無い。

ちかくに「海の家」があつたが今は3月だ。
おそらく誰もいないだろう。

「あー、キヨウだったけ

俺は村長？であつてんの？

とりあえずこの島で一番偉い人に会いたいんだけどさ、どこにいる
か分かる？」

「何で村長に会いたいの？」

「ああ村長であつてたのね

おれはな、この島に引つ越すんだよ」

その瞬間、周りの空気が止まった。

しばらくの沈黙の後、キヨウが男の手を握って満面の笑みで喋りだ
した。

「ようこそ火人島へ！！

引つ越してきた人なんてすごく久しぶりだ！！
これから仲良くお願いねおじさっおじさん！！」

「何でおじさんって言い切った!？」

何で一回言い直しておじさんって言い切ったんだ!!
言い直した意味ねーだろ!!」

大声で怒鳴りつけたがキョウはまったくひるむ様子もない。

「それでおじさんの名前は？」

「教えねーつつてんだろ」

「じゃあ村長がどこにいるか教えない」

「っな!」

予想していなかった反撃に男のが固まった。

自分ひとりで行こうとも考えたがこの島は結構広い。

一人だけでは確実に迷ってしまう。

安全に行動するためにはこいつに名前を教えなければならない。

「お・・・俺の名前は・・・

いっいや、これだけは!

しかし・・・・・・・・」

「なんで究極の選択みたいになってるの」

他人から見れば実にくだらな葛藤だったが本人にとっては身を切るような思いだった。

死ぬほどくだらないが彼はこの葛藤に30分近く費やした。
で30分後・・・

「もういいから言っちゃいなよ
楽になるよ」

「くっ………
分かった、言おう」

男はやつと観念して大きく息を吸い込み自分の名前を言い出した。

「おっ俺の名前は………桃色春太郎だ」

「ブッ」

キョウは思わず吹き出した。

「てめえ笑うんじゃねーよ!!!
てめえが言わせたんだろうが!!!」

「アハハ ごめんごめん」

春太郎が息を切らせて大声を出した

「はぁはぁ もういい

名前教えたんだから案内してもらおうか」

「そこだよ」

キョウが指差したのは「海の家」だった。
周りの空気が凍りついた。

「………てめえ バカにしてんのか？」

「嘘じゃないよ」

そついうとキヨウは小走りで海の家まで走っていった。

「おーい そんちょー」

「そこにいるわけねーだろ」

桃色が追いついてつぶやいたときだった。

「ハーイ 読んだかい!!」

そついうテンションの高い声が聞こえると海の家奥から一人の壮年の男が現れた。

その男は何とも説明しづらかった。

まず男の風体だが、真っ白なスーツ、金髪オールバック、そして胸ポケットには赤いバラが一輪さされている。

そしてなぜか柴犬を連れている。

そんな格好の男が3月の海の家から現れたのだ。

桃色は言葉を失った。

「おやキヨウかい
なにか用かね？」

「この桃色春太郎って人が村長に用事だつて」

「ああ君が桃色くんかい？
話は聞いているよ、入ってくれたまえ」

「・・・・・・ハイ」

冷静な判断力を失っていたのか、桃色はツッコむこともせず海の家に入っていた。

第1話 心霊スポットは基本何も起こらない（後書き）

なんかグダグダですみません

一段落したらキャラクターの設定でも入れようと思います。
感想も書いてくれたらうれしいです。

あつ、あと瀬戸内海に火人島はありません。

第2話 計画は思うように進まないようにできている

海の家の中は思ったより普通だった。

変なおっさんが住んでる割には普通だな、というのが桃色の感想だった。が実際に口には出せなかった。

「とりあえず紅茶でもいれよう
ここで待っていてくれたまえ」

「ああ ありが・・・」

その部屋のドアが開かれたとき桃色は言葉を失った。

その部屋は海の家からはまったく想像できない部屋だった。
まず、驚くほど広かった。

床に絨毯が引かれている。シャンデリアがある。

ヨーロッパの貴族の部屋を思い浮かべてくれれば大体間違いはない。

「どーなってるんだコレ!？」

「私の趣味でね」

こんな雰囲気の部屋が好きなんだ」

「だからってやりすぎだろ！」

「つかじゃあなんで海の家に住んでんだよ!!」

「私の趣味でね」

海の家が好きなんだ」

「どんな趣味!？」

まあ落ち着いてとんだめられ、ソファに案内された。
村長の格好は、海の家から出てきたときは異常な服装に見えたが、
この部屋の中では驚くほど馴染んで見えた。

「あつ私お茶よりジューズがいいな」

「お前まだいたの」

隣に座ったのはキヨウだった。
いつのまにか、というか当たり前の顔をして座り込んでいた。

「ああキヨウ済まないがシルヴァ・ムーレスト・ランガードを小屋
につないできてくれないか」

「なにその中二くせー名前?
その柴犬の名前なの？」

「分かった
おいでシムラ」

「犬の名前勝手に略してんじゃねーよ」

キヨウがシムラをつれて外へ出て行ったあとさて、と村長が机をは
さんだソファに座った。

桃色の前に紅茶が出された。

「君がこの島に引っ越してくる桃色くんだね
私は村長の大谷だ」

「はあ、どーもな村長さん」

何のやる気も感じられない気だるげな声だった。

「村長とは呼ばなくていいよ

堅苦しくて好きじゃないんだ

気軽に【ダンディーな紳士】と呼んでくれてもけっこうだ」

「いや呼ばねえよ

なんで気軽にほうが字数がはるかに多くなってんだよ」

出された紅茶に砂糖を入れながら桃色がつつこんだ。

「それにしてもこんな心霊スポットとして有名なところに引っ越してくるなんて変わってるね

こっというのが好きなのかい？」

村長が紅茶を飲みながら話しかけてきた。

が、熱かったのか自分で作って口に合わなかったのか、一口飲んですぐにおいてしまった。

「いや、できるだけ人と関わらなくてすむところに行きたかったんだ
場所は人が少なけりやどこでもいいんだよ」

「え？」

今あなたはダンディーって言ったかい？」

「言ってねえよ！」

「冗談だよ」

ハハハと笑いながら、村長はゆっくりとたちあがった。

「そろそろキヨウも帰ってくると思うしね
茶菓子を用意しようか」

「私チョコレートがいい！」

村長が立ち上がると同時にドアを開けてキヨウが小走りで入ってきた。

おじゃましーすと小さく言つと桃色の隣に座った。

「なあ、茶菓子はいいから案内してくんない
俺もう家に行きたいんだけど」

「ははっダンディーすぎてすまない」

「言つてねえよ」

「つかお前さっきの聞き間違い冗談じゃなかったな」

キヨウのリクエストどおりチョコレートが二人の前に出された。

何かアルファベットで書かれておりどこかの国の高級品であることが予想される。

村長は向かいのソファに座り、話をはじめた。

「では話を再開しようか」

「再開って始まってもしないねーだろ」

「ははっダンディーすぎてごめんなさい」

「いや言っただけでねえつつてんだろ!!」

チョコレートをはおぼりながらキョウが横から口を挟んできた。

「村長いい人だけどまともに話したらすごい疲れるよ？」

用があるならとりあえず私に話してみなよピンク」

一瞬なにを言われたか分からなかったが、落ち着いて聞き返した。

「おいガキ、ピンクって誰のことだ？」

「もちろんおじさんだよ！」

おじさん名前嫌いっていつてたからニツクネーム考えたの！」

桃色イコールピンクという年相応の単純なニツクネームだ。

が、桃色がそんな簡単に納得できるわけがない。

「お前さあ『おにーさん』にむかって、ピンクはないんじゃないの」

「えー可愛いよ？」

「だから嫌なんだよ！」

子供相手に本気になるのは大人気ないと本人も思っていたが、これだけは譲れなかった。

二人がギャーギャーと言い合う横でチョコレートを食べ終えた村長が、

「では家まで案内しましょう
着いてきてください」

といい立ち上がった。

「ああ やつと案内してくれんのね」

「えっダン・・・」

「ダンディーは言ってるねえ」

私のチョコレートと叫ぶキョウの声が聞こえたが無視した

第2話 計画は思うように進まないようにできている(後書き)

予想以上に長くなったのでまたここで切ります。

グダグダですいません。

感想お願いします。

人物紹介はもう少し後になるようです。

第3話 久しぶりに家に帰ると他人の家のような気がする

「荷物はもう届いていると思うよ」

村長の言うとおり家にはいくつかのダンボールが積み重ねられていた。

ここからは海は見えないが、海の家からは徒歩20分ほどで着いた。最初見たときは広いと思ったがそのほとんどは山のため人が住んでいるところは少ないらしい。

ちなみにキヨウは来ていない。

村長がかわりのチヨコレートを出してやったため海の家に残った。

桃色の家は民家の集まった村のようなところからは少しはなれたところにあつた。

普通より少し大きいぐらいの木造で和風の家だ。

庭もあるが手入れがまったくされていなかったのか草木が生い茂っている。

「思ったよりひでえな・・・」

「ははっ大丈夫

家の中はちゃんと手入れしてある

私がコーディネートしているから安心してくれたまえ」

数秒沈黙が辺りを包んだ。

その後、桃色は一気に走り出し家の玄関へ向かった。

ガラスと勢いよく玄関を開けた。
その中は予想通りになっていた。

まず、木造の住宅にシャンデリア、ヨーロッパなカーペット。
そして赤いバラが花瓶に飾られていた。
壁にはいくつかの絵が飾られている。
海の家よりグレードが高かそうだった。

「・・・なにしてくれてんだ」

「私なりの歓迎さ」

「いらねーんだよ!!」

なんで空き家を勝手にリフォームしてんだ!!

つかこんな和風の家をよく洋風にしようと思ったな!!」

「私の趣味でね」

不可能を可能に変えるのが楽しいんだ」

「可能になってねえんだよ!!」

今すぐ戻してくれ!!」

「それは無理

お金がないからね」

まったく悪びれずに村長が言い切った。

そっぴゃキョウもこいつと話したらすごく疲れるって言うてたな。
それを思い出して桃色は言った。

「やつ、もういいから

出て行ってくれ

後は自分でなんとかするからさ」

「えっ、dandhi?」

「言ってねえしスペル間違えてんじゃねーか!!
出て行けっつつてんだよ!!」

一人で大丈夫かいという村長を無理やり追い出し、片づけをはじめた。

「もう絨毯はこのままでいいな
とりあえずの問題はこれなんだよな・・・」

桃色が見上げたのは天井にぶら下がっているシャンデリアだった。
やたら大きく、もし落ちたら大怪我をしそうだった。
なによりこれをどう処理すればいいのか分からない。

「普通に電灯処理する感じでいいのか?
とりあえずバラして庭に置いとくか・・・」

シャンデリアは解体して庭においておくことにした。
その内燃えないゴミとして出すつもりだ。

後の片付けは比較的スムーズに行えた。
スムーズといっても2時間近くかかったのだが。

壁に掛かっていた絵は重ねてダンボールに入れたし、バラは捨てて
花瓶はもともあつた場所においておいた。

ほかにも奇妙なところはいくつもあつたが、気にならない程度にな
ったのでもう放っておくことにした。

「さて、あとは俺の荷物だな」

「ねえねえ

ピンクって医者なの？」

後ろから聞こえた子供の声。

ぱつと振り向くとそこにはキョウがいた。

荷物をひっくり返してその中の医療の専門書を見ている。

「てめえ何でここにいんだ！？」

「フーかどこから入りやがった！？」

「窓かつ、普通に玄関から入ったよ」

「今明らかに窓って言い切ったろ！

荷物ひっくり返してんじゃねえよ！

返せっ！！」

キョウの手から本を取り上げるとダンボールになげいれた。

そのあと散乱している本を集めてダンボールに無造作に詰め込んでいる。

「本棚あるのにダンボールに入れるの？」

「そんな無理やり入れたら本が傷んじゃうよ」

そういいながらキョウは新しいダンボールをひっくり返した。

ダンボールの中から荷物がドバツと流れ出る。

「ひっくり返すな！！」

てめえ人の話し全然聞いてねえな！！

いい加減にしろよ、もう3話目なんだよ！

本当はこの話1話の予定だったんだぞ！！

てめえらが予想以上に人の話し聞かねえから全然話が進まねんだよ！！」

桃色がつつちやけた裏話をするがキヨウは聞く耳を持たず、荷物を物色しはじめた。

その荷物は小物が多く入っていた。

筆箱やスリッパ、何かのケース。

いろいろなものが無造作に詰め込まれていたらしい。

「なんだろコレ？」

その中からキヨウが手に取ったのは写真立だった。

茶色いくつかが貝殻がつけられている。

ところどころ色がはげており、おそらく手作りだろう。

その中には、中学生ぐらいの少女の写真が入っていた。

「ねえコレだ『出て行け！！』」

キヨウが言い終わる前に、桃色がこれまでで一番の大声で怒鳴った。

キヨウがびくつとなり写真立をその場に落とした。

桃色がその写真立を拾い本と同じダンボールの中に放り込んだ。

「いい加減にしろよクソガキ

俺は誰にも会いたくねえんだ

それだけじゃなく思い出したくないことまで引つ掻き回しやがって今すぐ出て行け」

「・・・・・・・・」

キヨウは泣きそうな顔をしていたがなかくに何も言わず、家から出て行った。

もう太陽は西に傾いていた。

第3話 久しぶりに家に帰ると他人の家のような気がする（後書き）

桃色の言うとおりこの辺は第1話の一部の予定でした。

第1話はまだ続きます。

もう第3話だけだね。

第1話が終わったらキャラクター紹介を入れようと思います。
グダグダやっててすいません。

あつあとダンディーのスペルはd a n d yです。

第4話 後悔先に立たず

桃色の家の前に白スーツの男・・・村長の姿があった。
今は午後の6時。

そろそろ片付けは終わった頃だと思い、差し入れを持ってきたのだ。

「やあ、片付けはすん…うおっ!？」

玄関をあけて入ったが、その家にはやたらドス黒いオーラのような
ものが立ち込めていた。

思わず差し入れのチョコレートを地面に落とした。

「も・・・桃色クーン？」

どこにいるんだい?」

村長が恐る恐る声をかけると、奥の部屋からガタンと物音がした。
その部屋は物が散乱しておりまったく片づけが進んでいなかった。
よく見ると、段ボール箱の一つに人が入っている。
まあ、確実に桃色なのだが。

「どっ、どうしたんだい!？」

まるで・・・まるで・・・ダメだ、いい感じに例えられない!
とにかく一体何があったんだい!？」

「自分の大人げの無さを反省してるんです・・・」

「は?」

「子供相手にムキになった自分が恥ずかしい・・・」

もうだめだ・・・このまま死にます・・・」

「そんなことはどうでもいいんだ!!」

それよりシャンデリアがなくなってるじゃないか!!

一体何があっただんだい!？」

「人が死ぬつつつてんのにシャンデリア？」

イラッとしたが大声でつつこむ気力は無かった。

「本当に元気が無いな・・・」

とりあえずこのバラをあげよう
だから元気を出して」

「いりません」

そついつて出されたバラを手で払い、再び段ボール箱のふたを閉めた。

村長は諦めたのか立ち上がって、チョコレートの箱についている土を払いながらしゃべった。

「ところでキヨウは来ていないのかい？」

君に興味を持っていたようだから絶対いると思ってチョコレートを
持ってきたんだが」

その瞬間、段ボール箱の中からあふれる黒いオーラがどつと濃くな
った。

「キ...キヨウと何かあったのかい？」

恐る恐る聞くと桃色はさっきの出来事を話し出した。
読者の皆様は3話の後半辺りを読みなおしていただきたい。

~~~~~以下略~~~~~

「……………つーわけだよ」

しばらくの沈黙の後村長が口を動かした。

「なるほど……  
私はdandyだと」

「うんスペルはあってるね、じゃねーんだよ  
マジでいい加減にしろよ  
ぶちのめすぞ」

「冗談だよ 流石にね」

村長はハハハと笑うとまじめな顔になってこう続けた。

「まあ、それは確かにキョウが悪いね  
それで君はどうしたいんだい」

「……………」

「やりたいことがあるならはつきりしたほうがいいよ  
転ばぬ先の杖って言うだろ」

「意味ちげーだろ！

後悔先に立たずとか後の祭りとか・・・  
まあそんなかんじのやつだろ」

桃色がイラついたようにつつこんだ。

段ボール箱から出て、ゆっくりと立ち上がった。

「・・・キヨウがよく行くところ知ってるか？」

「その道をまっすぐ行っただころにある火人神社  
あそこでよく遊んでいたな」

桃色は道を確認すると、一度背伸びしてまっすぐとその方向を見た。

「ちょっと暇だから散歩に行ってくる」

「暇なら片づけしたほうがいいんじゃないのかい？」

「いやちょっと空気読んでくれない！？」

そうつとすぐに走り出し、神社へ向かった。



#### 第4話 後悔先に立たず（後書き）

しつこいようですがまだ続きます。

たぶん1話は次で終わりです。

5つに区切るようになりましたが感想よろしくお願いします。

## 第5話 田舎の噂はやたら広がりやすい

村長に言われたとおりそこには神社があった。

こんな小島にしては大きいものだ。

そんなに距離があつたわけではないのだが、ここまでくるだけでもうだいぶ日も傾いきた。

「おい

誰かいるかー？」

誰かというかキヨウを探しているのだが、怒鳴った手前直接呼ぶほどの勇氣はなかった。

呼んでからしばらくして、境内の扉がガラツと開いた。

しかし、そこから出てきたのはキヨウではなかった。

「なにかようかしら？」

そこから出てきたのは二十歳前後の女性だった。

黒い長髪で、赤い袴。

まさに巫女さんだった。

色は白く美人だったが、見える限り手首と首に包帯がまかれていた。

「あ、ああ

薄茶の髪のカキを探してんだが知らねえか？」

「キヨウのことかしら？」

さっきまでいたけどもう帰ったと思うわ」

巫女さんは眠そうな目をこすりながら続けた。

「そういえば、誰かに謝りかたを教えてって言ってきたわ  
よくわかんなかったけど、自分に同じことしてもらえば許してくれ  
るかもって言ったわ」

「よくわかんないなら適当なこと言っなよ!」

「だって関係ないもの」

ふああとあくびをして言い返した。  
その姿からはやる気も何も感じられない。

「そいつどこいったか知らないか?」

「ハア、いちいちうるさいわねゴミ虫野郎が  
・・・ああごめんなさい、口が滑ったわ」

「おい、今の『口が滑った』で片付けられるレベルはるかに超えて  
んぞ」

「謝りにいったと思うけど  
ピンクって人この島にいたっけ?」

「無視すんな!!」

なんなんだ、この島はバカしか住んでねーのか!」

「ところで私もう寝たいんだけどいいかしら?」

「チッ、時間取らせて悪かったな」

こいつとは話しても無駄だと直感するとすぐに諦めた。

桃色が後ろを向いて走り出すと、もう一度あくびをして巫女さんは境内の扉を閉めた。

桃色が家に帰ると、そこには誰もいなかった。

散乱していた物は桃色が入っていたダンボールに片付けられており、そのダンボールの上にチョコレートと村長の書置きがあった。

書置きには「キヨウと仲直りしたら食べてくれたまえ」と書いてあった。

「？裏にも何か書かれてんな」

確かに裏にも書かれていた。

そこには「なにかあったらいつでも頼ってくれたまえ、私ならいつでも力になる」とかかれていた。

「なにこの微妙な優しさ？

なんか気持ち悪！」

読み終わる前に紙をその場に叩きつけた。

「くそ・・・

あいつどこ行きやがったんだ」

「誰探してるの？」

「うおっ！-!」

いつのまにかチョコレートを食べていたキョウが話しかけていた。

「お前いつからいたんだ!？」

「ピンクが帰ってくる少し前だよ

だいぶ暗くなってきたからさっさと謝って帰ろうとしたら、いなか  
つたんだもん」

言いながらもチョコレートを口へ運びもうほとんどなくなっていた。  
横から桃色も座り込んでチョコレートへ手を出した。

「それでね

縁のおねーちゃんにきいたらおなじことをさせろってさ」

「縁ってあの巫女か・・・」

桃色はさっきの包帯の巫女さんの姿を思い浮かべた。  
ゴミ虫野郎の影響でいまだ思い出すとイライラした。

「なんだか見られたら嫌なものみたいだったからさ  
私も見られて嫌なものを見せるよ」

「いや、別にい・・・」

そこまで言って桃色は言葉を失った。

キョウは髪をかきあげ隠れていた左目を見せていた。

その左目のまわりは火傷の痕があり、眼球は白く変色していた。

「どうしたんだよそれ・・・」

「あの写真の理由聞かせてくれたら教えてあげる」

つまりは聞くなということだろう。

かきあげていた手を放して髪を元に戻した。

「コレで許してくれる？」

「あー・・・」

バツの悪そうな顔をして桃色はこう続けた。

「いや昼間のあれはこっちが謝るべことなんだよ  
怒鳴ってすまなかった」

今日はホツとしたような顔をして、チョコレートを口へ運んだ。

「よかったあ！

友達とこんな風に気まずくなったことが無いからどうすればいいかわかんなかったの」

「友達い？」

まだあつて1日も経ってねーだろ」

桃色が訝しげに言うと、にっこりと笑ってキョウは言い返した。

「それでも友達だよ！

かりに今は友達じゃないとしてもそのうち友達になるから同じだよ  
！」

「なんだそ．．．『やあ、仲直りしたようだね！』」

桃色が言い終わらないうちに村長が入ってきた。  
しかし、土足のままだ。

「いや、靴を脱げ！！」

何で当たり前の顔して人の家に、しかも土足で入ってきてんだ！！」

「アメリカでは普通なのさ」

「ここは日本だ！！」

大体おめーも日本人だろ！！」

「えっダンデ『ダンディーは言ってねえ！！』」

「まあそう突っかかるのはやめなよピンク」

「ピンクって呼ぶなっつつてんだろ！！」

「でもみんなピンクって呼ぶと思うよ？」

その瞬間、桃色は口へ運ぼうとしたチョコレートを落とした。

「．．．おい、どういうことだ？」

「だって私がみんなに紹介したもん

新しく引越してきたのはピンクっていうお医者さんだった！」

「ふざけんなあああ！！！！」

間髪いれずに桃色が叫んだ。

そのせいでチヨコレートが入っていた器がひっくり返った。

「ああ！

食べ物的大事にしないとダメだよ」

「まったくだ

世の中にはチヨコレートを食べられない貧しい子供達もいるのだよ分かってるのかいピンク？」

散らばったチヨコレートを拾いながら村長が言った。

「お母さんかてめーは！！

大体てめえもピンクって呼ぶんじゃねえよ！！」

「もう手遅れだけどね

みんなピンクって認識してるよ」

「これからも島の人々と仲良くしてくれるたまえピンク」

「ピンクって呼ぶな！！」

「火人島へようこそ！！」

「このタイミングで言うなあああああ！！」

桃色の声が夕日の染める島に響いた。

こうして桃色<sup>ピンク</sup>春太郎の新しい生活の1日目が終わった。



## 第5話 田舎の噂はやたら広がりやすい（後書き）

ここまでが1話にまとめる予定でした。

感想を入れてくれると嬉しいです。

予想よりはるかに長くなりました。

次の更新は来週辺りになると思います。

次から人物設定をここに入れていきたいと思いますのでよろしくお  
願いします。

## 第6話 新生活ってなんかあこがれる

「やっと片付いたな・・・」

収集所にゴミを置きながら桃色がつぶやいた。

昨日はキヨウとの喧嘩のためほとんど片づけが進んでおらず、この日一日かけて片付けたのだった。

一日といっても大きな家財道具はあまり持っていなかったので、荷物の運び込みは午前中に終わった。

午後はほとんど村長の持ってきた花やらシャンデリアなどの処理に使っていた。

「これで何とか生活できるな」

「おかえり！」

帰って玄関の扉をがらりと開けると、奥から子供の声がした。

奥の部屋に行くとキヨウが桃色の漫画を読みながらソファに寝転んでいた。

土足で。

「色々言いたいことはあるが、まず靴を脱げ!!」

「アメリカだと普通だよ？」

「ここは日本だ!!」

そのネタ前の話でもやったる!!」

はいはい、とゆっくりと立ち上がり漫画をその場において玄関に向

かって小走りで向かっていった。

「家の中で靴履くなよ」

「大丈夫だつて

あの靴ちゃんと洗ってきたし  
そこでシムラの糞踏んだけど」

「最悪じゃねーか、なにが大丈夫なんだよ！！  
お前の頭が大丈夫か！？

っ！が最初から土足で入る気だったのかよ！！」

「まあまあ、

チョコレート一緒に食べよ」

そういつて出したのは20cmほどある長いチョコレートの棒だった。

側面に『チョコ金属バット』と書かれている。

「なんだこのパクリ

どのへんが金属？」

だされたチョコレートをかじりながら言った。

「時々、鉄が入ってる

釘とか」

「駄菓子に入れていいモンじゃねーぞそれ」

二人の食べたチョコ金属バットには幸い何も入っておらず、普通に

完食できた。

「で、おまえは何しに来たんだよ？」

ゴミを捨てながら桃色が聞くと、キョウは手についたチョコレートを舐めながら答えた。

「うん、村長がコレ渡してきてっさ」

そういつて取り出したのは一枚の白い封筒だった。

ところどころバラのプリントがされており村長らしいものだ。

桃色の中から一枚の手紙を取り出すと何の躊躇もなくその封筒をまるめてゴミ箱に投げ込んだ。

「なんだコレ？」

その手紙は歓迎会への案内状だった。

村長の住んでいる海の家でするらしい。

その便箋には下のほうにバラだけでなく村長の顔までプリントされていた。

読み終わると桃色はその手紙をためらいなく破り捨てた。破るのと同時にキョウのほうを向いて言った。

「行かないって伝えてくれ」

「何で!？」

目を丸くしてキョウが大声を上げた。

「私も少し思ってたけどそんなにこの手紙が不快だった!？」

「いや、それもあるけどさ・・・  
っ！かお前も思ってたんだな」

桃色は少し嫌そうな表情で横を向いた。

「確かに誰にも会いたくないって言ってたけど歓迎会ぐらい顔出してよ！

この島の人みんないい人だからさ！」

「・・・・・・・・」

桃色がすこし黙って考えると、キョウが背筋を伸ばしてこう続けた。

「分かった、

もっとかわいいあだな考えてみんなに伝えるよ」

「はっ！！？」

がたんと一気に立ち上がりながら桃色が怒鳴った。

「ふざけるクソガキ！」

「春ちゃんは？」

「いやだっつってんだろ！！」

「リボンちゃんなんてどう？」

「俺の名前の原型ゼロじゃねーか！！」

「おじさん」

「二十代だ!」

「じゃあバカで」

「もうただの悪口じゃねーか!」

こんなやり取りがしばらく続き、結局桃色のほうが折れた。  
ちなみにこの後キョウが出したのはすべて単なる悪口だった。

「わかったよ!!」

行けばいいんだろうがくそつたれ!!」

「オツケー、じゃあ行こうか!」

そういうと、キョウは走って玄関からでてっいてしまいそれを追いかけるように桃色も走っていった。  
もうだいたい薄暗くなっており、月が空に見えている。

「あつ今日は満月だよ!」

「しらねーよ!」

二人の声が何もない島に響いた。

## 第6話 新生活ってなんかあこがれる（後書き）

予告どおり今回から人物設定を入れていこうと思います。

桃色春太郎（28）

身長 / 180 cm

好きなもの

小説・漫画等

カレーライス

嫌いなもの

自分の名前

備考

主人公

基本的に素直になれないひねくれもの

悪態をついたあと勝手に自己嫌悪に陥ることがよくある

職業はキョウというとおり医者だがすでに辞めて火人島に来た

見た目はぼさぼさの髪で目つきが悪い不良

前回からしばらく時間が空いてしまいました。

更新は基本的に土日になると思います。

## 第7話 戦隊ヒーローはいつも5人がかり

今時刻は午後7時。

あたりはだいぶ暗くなっていたが、海の家の上り階段はいつも以上にぎやかだった。

「思ったより人が多いな・・・」

桃色とキョウが海の家につくとそこには100人程度の人が集まっていた。

浜辺にはいくつもの机が並べられそこに料理が置かれている。みんな飲んだり騒いだりで二人が着いたことには気づいていないようだった。

少し離れたところに立っているとキョウが村長を連れてきた。

「やあ、ピンク君

楽しんでいるかい？」

「いや今来たばかりだし、楽しむ気もねーし」

ぶっきらぼうに言い放つと、横を向いてしまった。

「つーかあの手紙は何なんだよ

不愉快きわまりなかったんだけど」

「私の手作りだよ

気に入ってくれたかい？」

「人の話聞いている？」



不愉快つつつただろ」

まあ楽しんでくれたまえ、という村長はまた海の家の中へ戻っていった。

「あらあなたは・・・」

村長の姿が見えなくなったとたんにまた話しかけられた。

声のしたほうを見ると昨日であった包帯の巫女さんだった。

手に「首狩り」とかかれた日本酒の一升瓶を持っており、頬が赤くなっている。

どうやら酔っているようだった。

「あなたがピンクって医者だったのね

目つきとか悪いからどっかのチンピラかと思ってたわ」

「相変わらず失礼だなおい

あとピンクじゃねえよ」

「縁姉ちゃんこんばんわ！」

巫女さんは手に持っている日本酒のビンをぐいっとラッパ飲みした。口からあふれた酒を手で拭くとまた話し出した。

「私は南野縁

まあ縁って呼んでくれていいわ」

「ああそうか・・・」

縁はビンを下に向け振っている。

もうなくなつたらしい。

近くにあった机から新しい酒を取るとそれをあけてまたラッパ飲みし始めた。

「お前酒はもうほどほどにしたほうがいいぞ」

「あげないわよ

そこにあるから勝手にとつてくれれば？」

「欲しいわけじゃねーよ

医者としての忠告だ」

桃色が縁の手からビンをひったくりながら言った。

実際、これ以上飲むと明日二日酔いじゃ済まなくなるほど飲んでいった。

が、その瞬間だった。

「うわああああん！！」

「！！！？」

縁から酒を取り上げた瞬間大声を上げて泣き始めた。

その姿はまるで子供でさっきまでの無表情な巫女さんの影は何もなかった。

「ピンクがお酒とつたあああ！！」

「えっちょっ、何だコイツ！？」

予想だにしない行動に桃色が困惑する。

あまりに大きな声のため周りの人の視線が集まった。  
縁はそれでも泣き止まずさらに大声を張り上げる。  
桃色は横にいたキョウに向かって声を上げた。

「おい何なんだコイツは!？」

「縁姉ちゃんはお酒が大好きだからね  
取り上げるとものすごく泣くよ」

「それ人としてまずくねーか!？」

確かに周りの人の視線も一瞬集めたがもうそれぞれ談笑している。  
いつものことなのだろう。

「かえしてよお!!」

思わず桃色は縁の手にビンをもう一度握らせた。  
すると嘘のようにすっと泣き止んだ。

「ええええ!？」

「なによその目は」

縁は無表情に戻っているが、涙のあとが頬をつたっている。  
泣きまねだったということはないだろう。

「ハーハッハッハ!!」

縁が泣き止むのと同時くらいだった。  
どこか不愉快な高笑いが聞こえた。

聞こえるほうを向くとそこは海の家屋根の上であり、そこに一人  
真っ赤な服装の男が立っていた。

「女性を泣かせる外道め!!」

そんなやつはこのヒビトレッドが倒してやる!!」

「帰れ」

「二文字でかえされた!?!」

桃色はあからさまに嫌そうな顔をして言った。

こいつが何なのかは分からないがこいつがきたらめんどくさい事になるのは確実だった。

が、そんなことはまったく関係ないといわんばかりに赤い男はとう  
つ、と屋根を飛び降りると砂浜に着地しこちらに走ってきた。

「で、なんだてめーは?」

「俺か?」

俺の名は火人戦隊隊長ヒビトレッド!

この島の平和を守るものさ!」

「いやそーゆーのはいいから  
本名は?」

「俺の名は青野銀二だ!!」

「青と銀じゃねーか!

どこからレッドが出てきたんだ!!」

いらついたように桃色がツツこんだ。

「相変わらず馬鹿みたいなことしてるわね」

縁が酒をぐいっと飲みながら言った。

「縁！

俺が来たからにはもう大丈夫だ！！

さあ早く逃げろ！！」

ぱつとヒーローのような格好をして縁に言うが、当の本人は酒を飲み続けておりまったくきいていなかった。

「おいキョウなんだこいつ」

「お前こそ誰だ！」

「お前は黙ってる」

隣から声をはさんできた青野を黙らせてキョウに聞いた。

「この人はこの島の駐在さんだよ」

「は！？

この小学生みたいなのが！？」

桃色は目を丸くして驚いた。

たしかによく見ると青野が着ている赤い服は警察官の制服ににている。

というか制服を赤く染めていた。

「警察もなんでこんなの雇ったんだよ警察も人材不足なのか？」

「で、お前は誰だ！」

「この人はピンクだよ」

桃色のかわりにキヨウが答えた。  
なに、と少し考えてからこう続けた。

「なるほどおまえがピンクだったのか  
ぜひ火人戦隊ヒビトレンジャーに入ってくれ！！」

「入るわけねーだろ！！  
なんだそのひねりのねえ名前！！  
どうせてめーしかいねーんだろ」

「大丈夫！  
ちゃんと俺を含めて三人いるんだ！  
ブラウンとパープルがな！」

「なんでそのマイナーな色をチョイス？  
ほかにも選択のしようがあっただろ」

「ほかがメジャーな色なら俺が目立たないだろ！」

「最低なヒーローだな！！」

それでも入ってくれと食い下がる青野を放って食事の会場へ向かつ

た。

縁は青野を誘って一緒に飲みに行こうとしていた。

「なんだこの島

変人ばっかじゃねーか

この島は変人しか生まれねーのか？」

「はは、でもこの島出身の人は村長しかいないんだよ？」

「そうなのか？」

キヨウの言葉に桃色が驚いた表情を見せた。

「うんっ、この島に住んでいる人はみんなピンクと同じで違うところから引越してきた人ばかりだよ

いろいろな思い出のある人が多いみたい

ピンクも同じじゃないかな」

この言葉を聴いてもう一度周りの人を見渡してみた。

さっきのただにぎやかな感じとはまた違って見えた気がした。

「どうしたの？」

「いやなんでも・・・」

桃色はゆっくりと息を吸い込んでこう続けた。

「誰ともかかわりたくねーって言ったけど・・・  
もうちょっと仲良くしてみようかな」

「それがいいよ！」

キョウがにと笑うと海の家を指差した。

「ほら村長達が何かするみたいだよ！」

そこは確かに人だかりがきている。

人垣の奥をのぞいてみると・・・村長と青野が全裸で踊っていた。人だかりから桃色が出てくるとキョウが話しかけていた。

「みんなと仲良くしてね！」

桃色はにっこり笑っていった。

「無理」

桃色はゆっくりと息をはいてその場に座り込んだ。

この島の奴らの和解することは永遠にないと改めて思った歓迎会だった。



## 第7話 戦隊ヒーローはいつも5人がかり（後書き）

鎧塚叶（7）

身長 / 117 cm

好きなもの

チョコレート

絵画

嫌いなもの

苦い味

備考

島に住んでる女の子

空気が読めない設定だけどよく考えたらこの島の連中全員空気読めないな

左目はひどい火傷の痕があり失明している

薄茶色の髪で後ろ髪は背中まであり、前髪を伸ばして左目を隠している。

今回の話は登場人物紹介も含めるつもりでしたが、結局二人しか説明できなかったですね。

とくに縁は包帯の理由まで言いたかったんですけどね。  
あと分かりにくいですけど緑<sup>みどり</sup>じゃなくて縁<sup>ゆかり</sup>です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7423o/>

---

ドクター・ピンク

2010年11月14日17時59分発行